



上卷

水印目向字

卷之二

同上

大正二年一月寄

中村楳雄氏贈
大正二年一月
宣現候ハ後河と申即下節ハ作也
家元食氣かよ生とテ
四年正月
三年のる
男西ハ尾形所浦樓也至
年正月
緒ア
年正月
緒の日
と
も
利翁也
之を
念首と
考
す
所
何も
い
と
も
先
は
内
人
考
す
所
何も
い
と
も

門曾 4
糖 775
卷 175

天朝の事は多々あつた。さうして是れの元のゆかりあるを
一矢書くとも足りぬやうに石川あれど、往々餘裕が在る。
名前を考へて、織田一義徳とありとぞねえと考へて、
河内守と云ふと考へて、おまかで、近江守と考へて、
有と考へて、今も首と考へて、これほどに生えを廢せず成
りの後次第と云ひやうり才氣の出でぬはめと考へて、
皆の口を擡げて考へて、

一作老、於家の胡麻を奉りて門外に肉巻食事の如れや下まちを五
と仕位也威之をもて前の大義よに老丈様役御仕事も相
り候也威嚴也中止すが如くとあくまでもうなづく
あ門内に身をもつたる

三月より一月、西行の時、林志文草堂より是の事より
不至と申す。内と申せし河讃源と申す。寧は
此也を知らざれども、其事に打滅又市中は未だ知らぬる。

一小枝山と御月の咲く夜の事
お家幸のトヒタリニテ
小情歌也歌

とよつまく大慶賀をもて林原少年をお迎えし高麗をかみを渡る
江佐の節の全氣の吹きへ併せ仕事やゆくめうの反覆とて
えふ送金國へもてやぬとて有角也て高麗をもてかれて
むちとやら方、余は欲しまくひとゆとよしとて
お義子、故へ太軍事方小跡とてらりと今の大氣が有
りあらかく三好伊都祐ぬともあくと索子よ江津を也計と
さきとり全般猪口かくとて也考すとよけとてともかくし
ト江津と伊都祐とけと印月丸の野より三好伊都祐意をさ
せんと余氣を打てを追打うれやむひ思ふと取てよみ
相次ぎみうちれを多き、余は江津より林原少年を也後
人教拂をもて、當方の生むるゝにれ勢のまゝ不佛也ト不
と立れやとて桂院御ひがりのれをもてまづれ人を止放
又歎と云也爲もと高麗をもて室持も、され難旋と云ひ
少傳清賀をもて御家ちのひへを聞候はば汝成の如

桂海言曰小物為津流
其氣也小氣也而國體也失之微
於家也山川中水也中物也而有方
人數者也是中事也而名也也全此
取氣也而爲也而爲也天下也
財也者是耶也全氣不存也也缺也
此氣也而有氣也而有氣也也全
人數也而有氣也而有氣也也全
氣也而有氣也而有氣也也全

なとをも口説かれたは下し玉のものゝとひをいはせられ
おもふをわすれどやまが内波谷と仰かせ付てとあともせぬ
あつて持り寄りや、天元くまの松木あれの屏とほ
すまむる東の松木根有りて、余も仰やくおの軍事部主
天候向様に、おちの身中津と毛野の御座、主に於て軍事
所を取れ節度事務は往々細角と。若村吉馬
詫ひ侍はるは、今より是を以て陸主との頼
中元方を聞て、御主て有りや小舟大も付使御奉
奉車の文子ありて、その功と常滑の城は、御城の事まじめ

石原義綱は、やまとを唐から邊境に奉る、あらわゆる
町名より東石、佐城町は、かづ川のまじたやで、
押出町は、大内、故ゆか、東石、佐「と」南次町
伊豆川のむすび、然所、今、被りて、うなぎを食く

よもやま事とあどじとあらすじをもつて書く前
少黒づとも

常も云ひゆる事の如きに由まつてゆえ想を爲す
將より自らうへ取る玉瀬川に下りては川の流れひやしかれど其處
そりが秋の津と櫛原村、あくは丘陵なりれども其處ちち
高麗國とよりてやうへ入る者常おゆとゆくしやる者なれば
信濃御産とゆくに也あらゆりとゆうて下り来るハ取るふ
所、此を院れん庄うる者多きを小ねと申してみほのひのち、
山城にて往くとて太宰府を出はる事多きとぞ
然あらば勤勵を送ることとて取て之切當の城をあら事
者あらず汝らの瀬川の壁にの城、川邊やく尾張がりあらがれ
者御身を被せんとゆるすと有あらす瀬川と川守
瀬川元からあるのうち押さへられと候りてくわはしき
數々し全のま月を一ヶ月のものとせと全きとて詰つて
やうて身にまつてこうやうれらうやうの事本とて御子とて汝
そりげにて御身とて櫛原村の城の處うるをはなむ事無体
あれはひつて櫛原とちくはくとてまゐるに今や娘
を高とて威儀嚴かに例、御茶を用意す松子の及くと見て曾
一高城の城主ゆゆく、名寄が生をす瀬川のゆく櫛原御
の御門の處よひ前とやすと津ゆくまゝ御門に御主を山を
せらひのたまうとて御身よりて武家を成(後)中村文定とて
父也高齋御前とてや好、様ふも先づも松木御手す草木と
やくはなむとてはうひ様ふもやうやくとて中村文定と尾張
御茶を供す本やれの内とてうれと櫛原村を助よつて御茶松
うち乾(古御)の時を奈良をうち日を為すとて御一葉松文乾(古)合
の御茶の取竹よりて柄のゆゑと大餘をもつて上野の蝶のこゝあ
望を又へ向きうねのこゝれとてたせや、その物を知るべく在め

うきやうばとの坊ゆもありもあらうのりあはせぬ、ちひけえ
やく演がえとれどいづれ、ゆうに移處を庫とゆく
一ちま永ち御の内をあ中あもおはりつめへ、城は是れと早
てこち方とや曲御一はよおし櫛を文ふ小地カツチナシヤ曲御ハシヒ
也竹板と二の丸押さ、や時機をウキ大活か活鳥山の方作二人は
犯仕様をうとすが、色は絵や人色は絵見ゆるが、口の
ちまと口元、ね背筋、あよ小地ナシと、曲御とまくら毛三人の夸す
でハナタキ、大慶人をうちハ的馬加木、一分ナシ城よ宗のる、半
中わま成門、後城、れまに城のまうらうよくらうと城とつを
人六傳中多御よほまよゆて、以下城御の内と、多御よ城と
昌戸丹波おま望南船、谷えちの志、桂田えみねぬまうて名と
す、名昌戸丹波ハ太久保ともう、江戸櫛若のゆへ、元年四月五日と云々
事と計をし櫛ハ、在候わらう、たるやうさくめのとこと
ゆゆきこありやく

往々たゞも角は立つやしまさ有也此を以て改めたりとおのむ
直れどもいふ事に即ち今がやの前引内記の如くに定まつて一あ
仕と云ふ事もあら一とぞ是事は然るやうの事と呼んでゆく事
仕事すゝ、やくせき事と云ふ事と爲めの阿、あざれとぞせす、いふ
不審よゆもあら、公罪事とも方仰すまざる事も有江主
さうやうとしらすの事とぞはのりきる事も負ひ得ま
あらずとてよふに至り、伏あれとこそ一高主とく所とは
ちゑみせりゆ、伏あれとくべからかち後仕行の之後
名あらかよがとねと好運とあり井田修と名はばくわせ
利田波とあつてくづくもあると一毒首かくとくとくとくと
修取扱く肩よをすとみあらわへそとねあはれ様む、因友
まうちまえめ難波、あくまともりとちあくと江戸江
戸より下とわ、やまうらりとく、事例の事例と云ふ事と
事とあらとれりもあらゆ

がくらむと、叔おもとすつりをす。多くは、意をものこす。一系所とも
思つて、さへ、物有、併し、あそちけねのうすれややしき、ゆき
をもとめて、わざと、とどかぬは、ゆるく、ゆるいの反へ
併し、そえも、物争は、併て、すまでも、ゆうがと、やむに、鐵
三毛鶴、様、事あわねの、肉、恵林らと、門で、安藤、黒壁古方
中よんねよく、小猪もと、ひきうち、今ち、おと、門た萬、房
猪もと、猪矢、よしれど、ゆと、ゆと、猪矢、猪矢
猪矢、巴甲殿、圓よしれん、人ねそ、ゆよ、よと、ヤ生せん、人ねと、しけ
どん、ねし、急角、入けと、ヤ甲殿、圓を、えらひ、もと、くらわなに、江
ヤ不とも、猪有もの、高二え、一あさと、れも、乍、また、せうこうの、
本の町と、ヤサ一町を、そぞう、町と、やち、全二、方、アシル、新嘉山
化、寄、そよ、ゆく、んの、うらを、修合、そぞう、そよ、ゆく、ゆく、
本有、日ち、えれど、威と、もの、あらわの、うらを、と、がうと、村が、山地、お
も、おもと、つらじ地と、も、今と

後はこゝへ移り御先をやらずもう少し方を心地よく
す所終不也ハラハ射羽きなぐれた途もとて、すうちにも
もあよ江戸へ來刀斗とも宣れ、とくにかがむとく被ひ事より
ちりりよお坊三坂の城下と打つめす。城およかよりせらん、前此
章印あ合ひ手へゆふをとども人のをまじめよ。あよと重
三宅萬喜内有肩よりおちえ行名とい生金門一吉も、おも
因およくちやく首ね百金有浦やくす首引在半身りをとく。首
故津とく能よ柵とゆひけとて、はるやか。も首丸と故津とくそ
ありよ能よ柵とゆまようちたむらひとく。ゆ九郎とゆちとゆまは後
故津かくゆくもは良きとゆ能のゆと。ゆ海十津九郎ゆとゆまは後
立柱や木を抱ゑて三坂の城よおまかわ流ちひ私を廢す。あ合ひ
東北地章よりハモハモの落葉もと紅葉有浦す。はくはく花を江
進山洞庭坐たぬゆうとく。おもへのお手てのち手ての竹林す。久
都のハジマアカシア、沖合合致の別

大塙の城の下に立候と申、城外へ繩を垂体もアリ。主に城と取
破城術も實れ城の跡半そくに立ち候、但主と主がて御下りん
此所もあゆ中と云ひ候事アリ、あゆよ津とも云々在近御は御令尹は清
代のちとて今事無事候人アリ、主がて上方候とて大塙の事よ
至高より不見れど也よ御津川と云候事アリ下見えぢ候よ此地ニ
有る清津又うらはせ候事アリ、ちねの町もつては此地也アリ
之また清はりとて江馬すまきとてや生内ちねの事つゝよ
ウキアリよ大山ケツキアリ樂田トヤミタカ文ヤシ主事中古
市ノ山角六鳥坂日向の坂アリとてハセアラ等名も候事アリとて
主教不事ヘヨサヘ、方舟ヘハナリとて、あ人の作セテ主事事
アリ有リもあ紀ハシナヒ一代の事事の合氣主と余山祇と云セん
教と考フ事多く是モ主事事アリとて主事事アリ、主事の事アリ
ルトキと清はりとて、あ人主事アリとて主事事アリ、主事事アリとて主事事アリ

豈意内法の御朱作と御誠てメトの達本をもハ無べと
やお詫、まゝ日の入時より御用を又治地の奉事にて二府平治連
桜せら金佐ち一株津樂の支那より奉食とゆげ御饌とゆうと
まよと報と申すけ治地足利ども時主を以て入江へゆくの
御と申すひて下りまよやくお入とあはせ下りて入江へゆく也や
主君のハ主の立處百姓物語法内故より余を書津えを
津津にさりて被取次が如きを有候る者書及城をとどく治
はアロウもを終、あら色、や先は南高津(セーヤ)など、
家中くあちより逃れ表露、城守に横現様ハ九月十日より
赤坂(セイハツカ)にて御方より六の波を出で、又ノ宵太田の
御子、御家系、あなやと中書御家人たるよしは若狭の
体とて、もててててててててててててててててててててててて
そよよけまわしててててててててててててててててててててて
根、根をとててててててててててててててててててててててて

洗脩の足利殿主をも御用より主事にて(ハ横現様
弓張御行とぞとお義教の芳の城のことを御城と有
門にし御射竹を廻と行とて一百の城の門を立てるを江
川をよどてててててててててててててててててててててて
やあめりよふが、有りとてててててててててててててて
四日やゆも、おまえを不思ひとてててててててててて
もひたむかうくの御事ある人ハ御手成とくとくとくと
御手成とくとくの御事ある人ハ御手成とくとくとくと
立ヤカ因ちよそとてててててててててててててて
汝のつてててててててててててててててててててて
夷の主とお連なる跡やとく(木曾)は御事あると云ひ北坂と西伏
志教、附赤坂と申書無教人、やうて度と西伏と申書無教人

吉川君と法門寺近江守命同馬中むね堂御令書
首と内川へ起入もんてあの内川（起こも内川）と押ひき坐すやく
後後津之介とやあも城主とも名作松前と押ひき阿城（まこと
欲よ江邊らひゆこととある町）进入やいの松主もひし候るせ御宣
内宮侍をとす立候よ育とさえようとよアキ（押ひき二
の丸の門はよ然事あひびひ門といひきわな志士人を出候ふ八
神社名久鳥と姓をとる帝一人久鳥人あ今鳴を
跡拂ひと角屋萬喜中井の庭園あり萬喜門下紹玄侯浦六齋
居ようねりを渡る御内宮久鳥内院（あくあく）かどもを渡る
（あくあく）として此も萬喜より河内にまたとくけ林より主のちの内
巴を津とくせ度を右往院御うちたはるあ（下ひた垣もとより極仕
城もすれ内院（あくあく）の度をとくの多大金也

水經注

中卷

冰節日向之

あれにあらうより下へよもよちとありてむくと
文方、裏の火もてとよとよせられ、然るは近きに退け多
と医師を正すもあらんと云う。江戸より二丈ばかり
之をよそへたよがゆくと、よほほん半とありひれえもんと
りんとお身じよせひよがよびなすれ二入をよこすと
おもんとひどつとを省かくが、然るはえハ替月を立
めやうつとくもひのねとて二丈もとを立すりて
手ら半うれにすわ人命ニテの手を切ゆるをかねば
ア、ゑ人をもろすと、えぞしれ、あ行きてとこと
りや往する本えバ波えとをあて教言を秋月ねの事
わがまくさくとて波え、ハぬつぶせを押すと是とほれ
東本は、住よ里中人を、家よ波えとそり、窓にて里方、近
前二年、余りうみねうちよすくされておはす見す秋
月入りつねうて重れどおは入すて人ト人ナキ人室てゆう
理りしりこれじ修よ夫主入ぬよ主入めぞりみをかく下
切て出てさんくよお念て引れれど鳥鷹御す詔きりお
うきく是役を勤とくの賜す官又私太也よづき、もニ
え家創出を後とて、荷物を運ぶて、今と計らて日向五
日をえれば日向ち人ねと、おれあらへうち入で凡とまきれぬ
ふと知てつまくよはれとを生まよ其と、年も内
五六十とそく、旗もよそ城中とめぐら弱石、年の内もか
勢とて防がよそてたひすれ、内の内よ、家更に
れたるちと日向守、若達とめぐらして、お方、やせりはこ
ても運と定めりぬちがふ。何とお城の、もとや秋月、近
忠一とお成のよ某あれを放海アガ根をりれば、やくあ城
のよと、けよまくおれ、一万石を下さきて叶へ、後人よそ
樂よその湯をどして、おもよなどと根るえれ、下に

今も角からうきを並且とあまく事
多きれバた病氣つきしらぬ原さんか金と集めてきてりま
ひり竹え東あふねの金合ひが日向ち原山より西一壁を
すも角よとむとひくかぬ元城とゆるのなど沙滅へん
す口筋半身もさなはれとまのを落あらはる金とつと
一万石と成りたりてはるの内よりてアドクサヌ真の節も
りそくりんやせひめとそして金と拂ひよつてあせば
初年より金と於てもと門檻までたどりて日写
御へ行をうちとろうてアヘ城とみゆ（吉原のゆへ内府の小こ
ゆくちえいとの鈴然（に）こり（煙てを衣て）とそね然（せ
九月十九日城山日向ち欠けよう十日中きて鈴然（に）き
走るよとま（内多）（内多）（内多）（内多）（内多）
の後り（もよと）（な後）（な後）（な後）（な後）（な後）
をまどりぬる原山より事のすらものとも

一室の年次評議の時

物次からぬ事無く取扱ひ威やく阿良又よ猪名坂
福島城より幼友義の口筋見てすら是をあわ
まことハシムトム久元城主久元義重よ江戸御
兵庫の内勤のれす又波多の波多川の波多主
井樓と有げや。ややとてゆきかへ波多川の
仕事り右大前と云ふもうちづをてめにとては
あがまを川河。江考とつけたるは仕事とつせよ
猪名は江考ある。ゆうとせをす

自らとこへ江かどくまゝハゆれ一もす中へりうるお
ち朝角のりとそよび五事あるあ人内へてまことは傳つ
きをえまて節ややアハ丹はラシハ日向は延年よか
日ちよ席下トとおとなほく节と左を会ひまく往來
延年日ちよ言とすと余也水たゞ佳ゆヒ處の戸えく有
因ち、延年主と仕主取内役内中ねれ也と有者度くわ日向
精成の候はけ宣言の罕々が持方う測と日向氣で節、後
よりハ内役ち半主と持仕様ぬ候れども多めにあそ
持方う測の況のあよ候り口引くもの約持方う測と中持直參
基立義あ人持方う測の勢も（被押にてまち内役ち度へ下押）
旗と主計れり

一
天雨せんぞ納が爲燒拂城(ナガヤ)阿天雨の爲燒拂(アヤマツブ)
ナカニシヨリ
ナカニシヨリモハ志士アリ切アサヒ
アサヒアサヒアサヒアサヒ
上和下ノ日向と西之
象成能キモトヤヒトハ
カニシヨル天雨(アヤマツブ)

松坂次へ京ニ奉の西城よみがれを徳川次へ伊豆の西城よみがれを

卷之二
叶九思

ひそかにキヤヨリ出でまちたりこうちアドモゼハリ月夜にと
宝ノヤハムリタナト高田と三友のやり合、モモ流花の玉京
もねとうちつゝ、モ内の方もモ負犯人教わく是を余今
日付よりがまえと並くあらまとつゝ、されよ三友月正家
吉は誠ともる柳本正家、やし、むのゆと、た今日の歌題たまふ
ゆゑくと歌作をりあすやとゆき、力と正家アリ仰
葉、アリも歌と行被歌、ハ正歌の花を、うるゆはと、とせて
や、歌ちあま立石、歌ミ大野被理來をわとぞ、あ、御
中村のかへり、とシよ、歌ミ大野被理とあ、庶民ハ宣く、あひく
と、まじめある被理とせく、うり、やと、からて、と、を、歌う
高すを、歌ミ大野被理と、お、うれす、下、うる、ま、あ、ち、押山
次郎と、も、高秋、ハ歌う、うり、やと、からと、ま、ア、ハ、
草、ア、布、西、ア、も、かく、歌、今、の、歌、と、は、ア、う、歌、お、う、わ、と、
心、お、う、歌、一、度、ア、ア、う、う、歌、

りえを身に附けて、之の後は、其の事に迷
惑を蒙るゝも、やうやく内をうちの取
扱い所へあらまし、津浦在用あり、又、
左を御持とひがひ清めのきえり、ゆ
びは、御手とひのたゞ、久世とひ大和とひ
主ありよて、名主とひ、主とひ、主とひ、
主とひ、主とひ、主とひ、主とひ、主とひ、
主とひ、主とひ、主とひ、主とひ、主とひ、
主とひ、主とひ、主とひ、主とひ、主とひ、

水都移。或記中叔

卷之三

水北日食記

一首の歌、まともに歌と押す。古事記の後醍醐天皇の傳承
は、鶴の身と卒日の本ハ少りぬるから骨とわ肉の二者より負
れ人多し、人多くて多きもの今ハ山嶽ゆの先祖と仰仰行とあ
里の邊界を定め、家業を守護せしむる也。押す。押す。押す。
此を古事記の鶴の身と云ふ。鶴たゞは、東洋の押す。押す。押す。
日本と鶴の神様を守りしもひき。かとぞくれへ取が一派は之ね
もやる。もやしてもよき。猪もた廢表。かとぞくれへ取が一派は之ね
や。食氣將もは達らへん。経。経。かとぞくれへ取が一本取らるる
然ちれど因づる根もの又れ跡りたりれぬ。因づるもよ。のうの
往來一向とす。天主寺の茶臼のひよしと主法を守護する
下縁度院、よ。他とそでなく。所。す。茶臼と汝よ。主法も
お糸合せあく。守るあく。守るあく。守るあく。守るあく。守る

やうへやく今ねとまほ押さと傳ふえぬ、絶版、りよせんに、ひあをだ
至る一あよま門邊の町とおもて天湯の川とことせ河よはなも
内里の筋のたぐい改まつて天王ちの石の清算とくに改め
ほくもくやくより御れ所よまうおもへせんどのにとも限事す下
を暮すを知る（此處、主帝せんじよりゆく御歎りをねまし候等
に江もとより放ちたと押さとやうの法泡とくらえれらに入り
アリよけとあらへるをれもあらへるをくわむよ
アリまどとあれ眞充を仰ぎ（せとばゆともてん幻奈）アリと
アリすよとれ活筋（せとばゆともてん幻奈）アリと
アリおと合せよおちくれ爲（ナシ）アリと
おは室御首とせ（それとく）アリ詫まし助を力とせ（おもて首）
アリを家筋當あらうセアツミをあはせのそと洋トのそと
はゆきもはせか（トヤ）今を支う（ヤ）あうとせ（年）の左ニ
人取る下（折）やもむ家まく（バス）人の御けの間小も

一
寧
江
內
之
中

前文書の事より、のびりあらや高とく氣を嘆
泣（泣）の事トヤ、丁度とんと音し足參半多々方より見下すて九月より三月
大考取次講本に至り産子（ひよめい）に附
肉身外縫合（縫合）する付経（付経）（内生外縫合）肉身外縫合（縫合）する付
子紅経（紅経）（大歎多内行（内行））（内行）（内行）（内行）（内行）

門の外へ向かふと、御子の手

一 肥後國 山林の所考、ね翁 本著也限於
大、誤也。隈江 得也親承也。ア 一塹の大野町
事方々と是也。篠井丹波又子も有記載焉。
ち草弓と有父も一族也。此河記考也。主義也。但弓根とそり落葉也。ア 事方大子のつどは篠井町也。時
小谷立石也。柳木下清房曰。考よれ上竹とも立ち居也。ねものなり。

一
山麻の城の事はよ。竹林へ下りて、主義と
桶元を仕て、成政押寄あらそ（ど）る。西アラテア連軍甲斐をもつて、おまねの金を遣して、然うの城と西を成政主義が、主義ニナホの主義と自力伐法（じりきばつ）と、桶井を主義に立たせ、やまとと二ヶ所の内城より自力、然うの外城へ疋敵（ひきどり）とすり
三
主義と主義（シマサキ）と、内見外見の主義と、
主義者と主義よをア城（シマサキ）と入ア時、内見の主義（シマサキ）と、毛利脣（モリブシ）と、内見の主義（シマサキ）と、毛利脣（モリブシ）と、人
ねと毛利脣（モリブシ）と、主義よをア城（シマサキ）と、内見の主義（シマサキ）と、毛利脣（モリブシ）と、人
津久主義（シマサキ）と、主義よをア城（シマサキ）と、内見の主義（シマサキ）と、毛利脣（モリブシ）と、人

そハ大軍數萬をもの及眉のうちし事事く沙（は第之）
あ處とへ寄化着とへす所より主兵所よほ是竹子のい
印印をあつとて一多切竹内兵分下トヘ神木坂堂事而
トテ若人汗毛と絶縁すあへて主兵所十門より人入源をよめ
いひとま二步内どりを務め、

一毛毛と下城りをあ仰びて麻のうよ山麻を高ヤリツキを立のと
もひりこ京の細き城を立ツリとゞよりて京の本城（今故に
立カレ所）に於て瑞木一あよまこと一翁子御所と云謂えやハ
瑞木物をも前よりニ面を立ハ川中島邊地より源
木を節量田地壁石等も少く日本小山に於ては押さもももる源
も川とテアシテ拂志ハると云してちゆ守主を揚す广の浦を
又ちゑひそひう欽ハ城（江としき城）ハ源アヤ

一作文

舊作健
軍宮

一例行文よりつきア九里原着と云被破ち達人より
ナシモノ是田地壁石井在在而人多く余か近くしておが、

ナシ九里原と内兵分石井の者とソガモチ源よ勢アヒ羅とテ
内兵分源地壁石と是性と至とある（たま）奉手延シテよばりや
主兵の助ちや助病父子ねる忍方とてあゆくとくねくとくに付
助病あくと内兵分石井地壁石の者とテ延シテよばりやとくに付
之と云ふと助病子内とてもの主兵の内兵分石井と
内兵分石井の者とソガモチ源よ勢アヒ羅とテの
御手延シテ源地壁石と達人と云被破ち達人より
之をもあらわれ名とばらす事とどバアミクシヒトナシヒトナシ
玉鳥内兵分石井の者と云ふとどクモヒトナシヒトナシ
おも居する者食後人ソシタクシタクシヒナシヒナシ
候もくねじ御竹内兵分石井の者と云ふとカーテカーテの
半ハナラナシと云ふと云ふとキとテ

小笠原守は肥後守と申す。室の城五郎守と申す。城より出でてあ
る處へ此を守門城と申す。そへ松之守が守りて居る。

新之助の事
はまちよし
とておひれ
一高級主事一後部中
馬鹿の威をもてて
神氣立つ

ひに至りては行はる自易の純乎猶未就御也従ハテ阿のゆも少く
済事奉節と申すはなち小姓大二主も又申すが故御也是モ如
ち御食殿ノ内行乞キ行尸

杜志ハ小西持満也。豈知志成の城とす。序。肥後ち人ね回あふ志
はの城とす。志成の城也。小西又云天原や波の城。伊豫妙
村也。さな波の城は、僕もとつけたうちめよ。す。あ。肥後ちもみの
ものか。も。小西を。あ。れ。ゆ。の。と。も。を。生
馬。馬。方。天。然。也。さ。ら。城。ち。く。ん。也。と。う。研。書。
つ。と。一。馬。天。然。也。小。よ。云。家。と。け。さ。る。君。の。ゆ。と。あ。れ。か。よ。ひ。う
り。と。詔。也。よ。て。う。ら。ぬ。き。也。高。下。松。志。城。と
志。志。阿。下。平。之。高。也。に。見。つ。と。と。松。志。城。よ。う。あ。と
あ。く。よ。あ。い。や。く。と。六。鳥。放。れ。れ。余。行。之。と。と。よ。う。も。く。と。あ。こ
第。第。行。力。行。く。見。合。下。キ。も。放。ち。次。入。よ。て。上。く。と。ヤ。下。城。の。下。あ
様。う。を。主。い。と。ひ。え。空。入。下。阿。波。合。金。六。款。空。も。よ。往。け。

んのうちとてのううえへつゝてもアリてサヌカシアリ
さ門とてトヤテ所故より又主湯とて人討し角之菟は若
細木村れ松文致ち若當に至林壁とめを森浦み引し今之
方の者うちやも油助ハラモモ能との御し山室ぬ御付の件のむ
シタモ行は後後以て次第アリ内三事と辰巳の毛野早了收納
トヨトハ根が藏ある事無事すと申シルナカニシハ御原
主後前事あらま

新書、あら是としげもと慶喜と年一望をあと
蟹江氏は法皇とまよが又如何をかうりが方ともぬの西を
きじ事務も人と言へキト中津川の馬鹿がち長政へ
多行勢りふをこも附せぬの仕へて將軍をうるがれりぐ
そとそくはねまくとひをもぬつゝとおのをなり、
クもづくとたまうらうすてあるのやううるるハれく
竹子とくわざくとくわざくとくわざくとくわざくとく
うみかこともうもう清音うりきは角角のまゝれ人
もそぞそとくわざくとくわざくとくわざくとくわざく
とくわざくとくわざくとくわざくとくわざくとくわざく
とくわざくとくわざくとくわざくとくわざくとくわざく
とくわざくとくわざくとくわざくとくわざくとくわざく
名前さんとすくわざくとくわざくとくわざくとくわざく
安藤と云百姓の辻と瓜藤化とハキシテ御音山の掲櫛を
物見れど本坂太さうぬつて代五業とアビ人とアビ人と
くよるすとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ
と切教してそとくわざくとくわざくとくわざくとくわざく
伍中四人行三行経持三荷合氣利奈方(五行四眾位十八名)れ
えねが人の服と妻と一ひととくわざくとくわざくとく
食てゆともあとくわざくとくわざくとくわざくとく
去あらうちに時々、口説よひて杜本を急ぎとおもひて御
事生或焉とすとあと今も待てまへ、改てあられのくの

以て刀をひてえりうれりばりえりとあゆ因まうえふ
うち前の刀とわざふちくすをきよもつてぶる方志哉」と
て勇とまかげりて三行経ち年少の花瓶とあくみを書
とをえまく西へ谷原をとて東をじるは花のまつはる
もうちあくまくはくらはくのまづはくらはく
れづくゆまづくて東行後とくに幸方よりと写しと
りくらまどかたよ後半して命めとけむか
おもとく見えと云事と云まわがけといまを
すすむをゆきと云えとまわがけといまを
見て只一をひよせてうつえ湯とまほとまほとまほ
礼とまほとおまほ下り少しよあめくら節のちとまほ
法礼とあくるはなとてひあやくら内庭とまほとまほ
あくみをかくはりそりをかじりて室らをも（門毫えりとあ
室を室よめのまほ方更に捺すとまほとまほ

えりを奉事の片途筋と達筆と達筆と達筆と達筆
ひき又移るるの仕合内に作付され御在へまつて
泰の武功は伊弉諾の元神八百のそくか七十万石を賣りけ
毛利神元國と清正と伊弉の毛利公三井社主ちへれど
日向ちとれでありられ、同忌と歎せんそふばりてとも
ほこと桂木とゆくよひ急ちとて御葬へゆる津島
石全と沙家とおもて清正ゆち壁の城より御守り
御病と爲りて言ふのぞとゆくりうそ
一揆又外御方政とぞくわくらゆくたゞて五年にて死と
泰又毛利とひらくとえりとえりとえりとえりとえりと
おれがおり方へとすり毛利とえりとえりとえりとえり

一物の半と半をもてて之にて之を大に美す

戸ノハタホミ不候るゆきり

宣承文字

水せ日向

二ノ五月日

猪瀬判

貢太麻院御日々向年、方こよぬわく御の仄音
トヨトキシムニテモセキ家乃の御度、既下見サた家ラ近ヒ
以、有らセテ

一、久世家の役永樂源、之後、大慶より、すまうの故と、乍、荒、
たの角ニテ、糸中よだ一、ひ、庚子ハ丸の内よ糸、アモリヤ。

子者之保矣。

今度於犯和治宗、劍舟舟、徒黨等を燒死五、六人、城、耗て後
天下巧に、行かぬ時、日東西、を活用、易報、即く、東城、守備
ノトキ未滿城、犯又、加え、を、も津、江戸、守、それ、候也、奉
者、家弓連一、高、高は、殺而、人、活捕、主と、は、捕え、殺戮、勿、及、粉骨
碎、と、既、死、中、方アロ、差遣

太麻院殿

御朱印

久世日向ち文
久世重徳

在の所、うち、す書、キ、漆、印、上

水せ猪瀬記下總大尾

清和源氏多田滿仲弟鎮守府將軍滿政後胤也自二
滿政迄水野忠政之系圖別書註之

忠政

水野右衛太夫

信元

四郎右衛門 下野守

女子

松平紀伊守家信室
鳥井左京太夫祖母

信近

藤九郎莉屋城主 駿河太守今川義元襲斬之

女子

贈大納言廣忠卿之室乃東照大權現之賢母
慶長七年八月廿九日圓寂年七十五傳通院光岳裕
和香大禪尼

某

監物祖父
織部

某

傳兵衛

某

傳藏

某

弥平大夫
為今川氏真被殺

忠善

監物

忠春

右衛門太夫

女子

松平和泉守室

女子

丹羽式部室
右衛門太夫

女子

片桐主膳室
右衛門太夫

女子

小出信濃室
右衛門太夫

女子

牧野遠江室
右衛門太夫

忠義

織部

忠元

監物

忠重

藤十郎 總兵衛 和泉守 從五位下
慶長五年七月十九日於參列池鯉鮒為奸凶

加賀江弥八郎 所刺遂率法名勇心賢忠

忠盈

豊前守

水野左近傳

松云藤次所討事詳出予

勝成

小谷國松丸 藤十郎 六左衛門 亲之助

從四位下 日向守

法名宗休

某

市正

某

弥十郎

忠清

隼人正

忠能

出羽守

忠直

總兵衛
出羽守

某

刑部

女子

大權現養之為子
号清淨院

忠直

八十郎 佐渡守
法名休翁良範大居士

重直

加納十太夫

勝俊

美作守

勝貞

日向守

勝廣

美作守

家譜終

井沢長秀記

右三卷借藩龍子之木寫之全不可佗見云峯寶永六己丑年八月十四日

慎軒主人松田秀誠書藏

此書用小書亦松云記者井澤蟠龍子書入也

于時寛政十戊午年殿春念二日以松田氏木寫之

益城下郡藤原邑中原株
住寺全直廉 九月六日

文政三年四極月十三日以寺本氏家藏木寫之

同月九日
起筆

中村萬喜直道

直道按井澤氏写半考
二半水即勝成自記
トアリ
今治市下野山陽丸子

入府主事不外
代序不考
内傳不考
孫名又水即活傳一卷有中

